

全小国研会報

No. 101

発行所
全国小学校
国語教育研究会
事務局
墨田区立
第一寺島小学校
事務局長 高橋誠人



新たな時代を切り拓いた宮城大会

全国小学校国語教育研究会会長

長沼正城

今回の宮城大会は、仙台市を中心に東北各県の皆様の「熱い志」が結集しての全国大会となり、実に34年ぶりの開催でした。実行委員長の片岡先生からは、当日の授業者は若手中心で、この機会に大きく育ってほしいという思いをお聞きしていただきました。まさにそのとおりの「若手とベテラン」、「積み重ねと挑戦」が絶妙に織りなす大会となりました。

私は二つの授業会場に、ついつい長居をしてしまいました。一つは『やまなし』の授業。ここでは一つの試みがありました。それは「AIの活用」でした。その是非については議論になりました。私はどの場面でのような活用をしたら効果的なのかを見出すことが大事だと感じました。つまり、自分たちの考えを出した段階で、「AI」に問いかけ、比較し、考えを深めことで、根拠が増えることを感じました。「AIとの対話」は、自分の「考えの軸」があつてこそ成り立つのだと思います。

また『こんぎつね』の授業にも目を見張りました。「自分の言葉」を探りながら絞り出そうとする姿が印象的でした。特に、「青い煙」の解釈をめぐって、思い思いに語る子供たちは、なぜ青なのか。ある児童は言いました。「青は「炎」でみると一番高い温度。だから兵十の気持ちが一番高まったという解釈」、そういうつぶやきも聞こえてきました。子供たちが、対話的な学習プロセスにおいて、確実に「考えの形成」を図る姿を目の当たりにし、清々しい感動を覚えました。

記念講演Ⅰでは、大塚健太郎先生（文科省・教科調査官）には、「自分の考えを形成する学習過程」を重視することを改めて明確にされ、強調されていました。「何のために伝えたいのか」という目的意識を明確にもつこと。それが伝わったときの「実感」「成功体験」が、「深い学び」となること。さらに次の「〇〇したい」につながっていくこと。その時の児童の姿は、ゴールに向かって生き生きと学び、「対話」を楽しんでいくことでしょう。そんな児童の姿を思い浮かべながら拝聴しました。

記念講演Ⅱでは、川島隆太先生（脳科学者）の「脳の中の前頭前野」の育て方を、多くのサンプルデータ（仙台市の児童生徒）に裏打ちされたエビデンスは、浅学な私に大事な「不易」を思い起こさせてくれました。確かに「音読」でした。日本人は昔から声に出して学び合っていました。

川島先生の数々の研究成果は、目から鱗が落ちる至福の学びの時間となりました。今大会のもう一面の成果は人材の育成と輩出。今、その力で国語教育の光を放つことができたことです。十年後二十年後に、再び東北の地で、新たな時代を拓く「全国大会」の開催に期待を寄せたいと思います。

（東京都清瀬市立清瀬第四小学校前校長）



第五十五回宮城大会を終えて

宮城大会 実行委員長

片岡有吾

令和七年十月三十、三十一日の両日、実に34年ぶりに宮城県の県庁所在地である「杜（もり）の都」仙台市において、全国各地から五百名近くの皆様からご参加をいただき、盛会のうちに幕を閉じることができました。今大会では、研究主題を「小・中・高をつなぐ国語教育の創造」く学びのつながりを目指して」としました。宮城県では、長年各校種ごとの研究はもちろん、七十年続く「東北地区国語教育研究協議会」さらには「宮城県国語教育連絡協議会」においても中学校、高等学校とともに研究・実践も積み重ねてまいりました。

本大会の一日目は、トークネットホール仙台（仙台市民会館）を会場に、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官・学力調査官 大塚健太郎様にご講演をいただきました。現在の学習指導要領となつて六年目の現在、本大会の主題とも関連付けながら、細やかに分かりやすくご指導いただきました。そして、東北大学加齢研究所 教授 川島隆太様には、「脳を知り脳を育む」という演題で、先生のご専門である脳科学のエビデンスに基づいた知見について具体的な資料を提示し、ご講話いただきました。我々が小学校国語科教育で大事にしてきた言語活動（音読、ノートに筆記用具で文字を書くこと、リモートではなく相手と対面で対話することなど）が、子供たちの脳の発達を促すことを再認識することができ、今後の授業実践への自信を与えていただきました。

二日目は、仙台市立南光台小学校、同富沢小学校の二校を会場に、午前中、十二の授業を公開いたしました。宮城県内の若手教員のこれまでの授業づくりの姿勢や生き生きと学習する児童の姿に、参加者の皆様から多くの称賛のお言葉を頂戴するとともに、その後、授業協議（分科会）では活発な議論が交わされました。また、午後にも、十二の分科会に分かれ、県内外、全国からの先生方より貴重な実践発表と深まりのある協議が行われました。この二日間、全国の参加者の皆様には、「おもてなしの心」を大事に、笑顔でお迎えすることを心掛けてきました。参加者の皆様には、ご好評の言葉やこれまでの労いのお声がけをいただきました。授業者はもちろんのこと、実行委員会一同、「本当にやってよかった」という思いを共有しています。

結びになりますが、五年以上の長期にわたり、本大会にご支援いただいた全小国研の役員の皆様、宮城の各国語部会の皆様、そしてご後援やご協力いただいたすべての方々感謝申し上げます。

（石巻市立前谷地小学校前校長）

第五十五回全国小学校国語教育研究大会 宮城大会
第七十回東北地区国語教育研究協議会 宮城大会

基調提案

発表者 仙台市立南光台小学校 校長 早坂 順子

仙台市立芦口小学校 校長 野中 映里

一 研究主題

小・中・高をつなぐ国語教育の創造

二 これからの社会に求められる力

現代社会は、予測困難な時代となっている。人工知能の飛躍的な進化は、雇用の在り方や学校において獲得する知識の意味にも大きな変化をもたらしている。しかし、人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考に目的を与えたり、目的のよさや正しさを判断したりできるのは人間であり、これこそが人間の最大の強みである。

学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、情報を見極めて再構成し、新たな価値につなげていく力が求められている。令和三年中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」が示す通り、一人一人の児童生徒が自分のよさや可能性を認識し、多様な人々と協働しながら、持続可能な社会の創り手となることが重要である。

三 求められる国語科の力

学習指導要領では、学習の基盤となる資質・能力として、言語能力や情報活用能力、問題発見・解決能力等を挙げている。言葉は児童の学習活動を支える重要な役割を果たすものであり、全ての教科等における資質・能力の育成や学習の基盤となるものである。そのため、特に言葉を直接の学習対象とする国語科の果たす役割は大きく、教育課程全体を見渡した組織的・計画的な取組が求められている。

中央教育審議会答申では、小学校低学年の学力差の背景に語彙の量と質の違いがあることが指摘されており、「語彙指導の改善・充実」が求められている。また、教科書の文章を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていくけるようにする「情報の扱い方に関する指導」や「学習過程の明確化・考えの形成」の充実が喫緊の課題となっている。

四 研究主題について

(一) 「小・中・高をつなぐ」について

学びの系統性と連続性 ー学びをつなぐ工夫ー

国語科の指導内容は、系統的・段階的に上の学年につながるのと同時に、螺旋的・反復的に繰り返しながら資質・能力の定着を図ることを基本としている。しかし、前の校種でどのような力を付け、それが次でどう生かされるかという意識は、学年や校種の間で必ずしも十分ではない。

系統性と連続性を確保するためには、教師が児童の実態や地域の特色に合わせ、小中高十二年間で育てたい力を明確にする必要がある。国語科は身に付いた力が曖昧になりやすい教科だからこそ、教師が現状と必要な力を的確に把握し、学校全体でカリキュラム・マネジメントを行いながら授業づくりを行うことが重要である。何より、児童自身が現在の学びが将来にどうつながるかを意識することが求められる。

(二) 「学びの深まり」について

考えを形成する学習過程 ー考えを広げ深める工夫ー

主体的・対話的で深い学びの実現には、三つの視点に立った授業改善が必要である。見通しを持って粘り強く取り組む「主体的な学び」、他者や先哲の考えを手掛かりに自己の考えを広げる「対話的な学び」、そして各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせ、情報を精査して考えを形成する「深い学び」の実現である。

国語科における深い学びとは、言葉への自覚を高めることであり、児童が言葉の意味、働き、使い方に着目して対象と言葉の関係を捉え直すプロセスを指す。児童が言葉による見方・考え方の変容を自覚し、教師がそれを見取ることで学びの深まりが生まれるのではないだろうか。そのためには、習得・活用・探究という学びの過程の中に「自分の考えを形成する学習過程」を明確に位置付け、児童が自ら学びの手ごたえと成長を実感できる国語教育を目指す必要がある。

【文責 大和田 友菜】

◆記念講演Ⅰ◆(要旨)(トークネットホール仙台(仙台市民会館))

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官・
学力調査官

演題「学習指導要領の趣旨の実現を目指して
「学びを深める子供を育てる国語科の授業づくり」

大塚 健太郎 氏

一 学習指導要領の趣旨・「言語活動」を通して言語能力を育む

現行の学習指導要領が施行されて六年目。施行当初はコロナ禍であった。言葉の教育においても、制限の中で育ってきた子供たちが、今後、「社会の創り手」になっていく。今までと違って、これから、世の中がどのように変わっていくか分からない、多様な価値観が隣り合って生活していく時代となる。お互いが納得しながら共に生きていくことを考えると、自分自身が主体的に「社会の創り手」になっていく意識が必要になる。この意識を小・中・高という三つの段階の学びを通してしっかりと「つなげて」いかなければならない。小学校の授業で、例えば「言葉はどう学んでいるか」ということが、将来社会に出たときにどのように「つながつて」いくのかを少しでも意識することが「小・中・高をつなぐ」ということになるだろう。その意識で単元を構想するとよりよい学習デザインになっていく。

国語科の教育は、どんな力がついたのかよく分からないと言われる側面がある。国語科は、「言語活動を通して」学習していく教科である。しかしこの「言語活動」というのが少々厄介というか悩ましいところでもある。「言語活動」をしているけれど、「どんな力が身に付いたのかよく分からない」という状況になりがちだ。そこで、「この知識は使えそうだ」という理解を伴った「言語活動」をすることで、知識が洗練されたり、適用範囲が広がったりする。そうした学びの中で「言語活動」を螺旋的に反復的に積み重ねていくことに意味がある。国語科で育成する資質・能力を、改めて指導者が明確に認識する必要がある。

その上で、児童自身が学習過程を明確に自覚できるよう指導していかなくてはならない。

例えば、「書くこと」では、最初に「書きたい」と思うことから、情報を集めてくる、どの順序で並べると相手によく伝わるか、相手や目的に合った言葉遣いで書く、最後にうまく書いているかを推敲する、というその過程の理解が根底にある。初めは身近なことについて書くが、いずれ中学でも高校でも、その学習過程は同じ。その内容は段々と「社会につながる」大きなテーマに変わっていく。書くときには同じ学習過程を通るが、より

内容を洗練させていくのである。この言語活動が主体的であればあるほど、対話的に物事が進んでいく。本気になればなるほど、友達がどう考えているかが気になってくる。だから対話の必然性が出てくる。必要に応じて、インタビュアーをしに出かけたり、オンラインで聞いたり、書籍と出あったりしながら、そういう経験を積み重ねながら広い意味での「対話」をしつつ学びを深めていくことができる。こうして学びはぐるぐる循環し、その過程で言葉が磨かれ、思考が確かなものになっていく。

二 現行の学習指導要領が何を大事にしているか

中央教育審議会答申においては、平成二十年告示の学習指導要領に示されている学習過程を改めて整理している。それは、「思考力、判断力、表現力等」の各領域において、学習過程を一層明確にし、各指導事項を位置付けたことである。また、全ての領域において、「自分の考え」を形成する学習過程を重視した。その「考えの形成」に関する指導事項を位置づけている。例えば、「話すこと」の学習で、マニユアルに「はじめ・なか・おわり」で話さない、と書いてあるからそれと通りに組み立てメモを書いたということでは意味がない。

何を伝えたいのか、何のために伝えたいのかを、子供が明確にもっていないと、「考えの形成」にはならない。やはり自分が何を伝えたいのか、そのことが伝わった文章になり、相手から感想をもらったときに、「ああ、言葉で伝えることって大事だな」という「実感」が生まれる。自分の選んだ言葉でうまく伝わった、構成を考えたら伝わった、という「実感」を大事にしたい。

このような視点で、学習過程を見直すと、改善点が見えてくる。活動が学びにつながる成功体験になるからこそ、次はより良いものにした、複雑なものに挑戦したいという学ぶ意欲につながるのだろう。その成功体験があるからこそ、もっと良いものに、もっと複雑なものにチャレンジしようという気持ちが生えてくる。「考えの形成」を捉える上で、「次の学習」への意欲も含めて、「成功体験」として終わることを重視したい。子供たちにとって、同じような学習過程を何度も体験することで、「話すときって、こういう流れだったな」、「書くときも同じだったな」という成功体験を思い出して、言語活動が強化されていく。「あのとき、うまくいったことが、ここでもう一度使えそうだ」という感覚になっていくわけである。

三 現行の学習指導要領の実現状況

令和四年度小学校学習指導要領実施状況調査結果分析により、成果と課題が明らかになっている。特に「語彙」については、様子や行動等を表す語句の成果が見られる。一方「思考」に関わる語句については課題がある。

語彙は系統的に指導するだけでなく、日々の指導の中で学習の量を確保し、質を高めていくことも必要である。語彙を修正したり、再構築したり、同じ言葉を見つける活動、反対の言葉、仲間の言葉、上位語、下位語を考えたりする機会に多く出あわせる。そのような学習活動で留意したいのは、「先生が言ったからやる」ではなく、自分からすすんでやっていくという姿が理想である。そういう形で質を高めていくにはどうしたらいいのだろう、ということ。「小・中・高」とバトンをつないでいってもらえたら、そこに出あう語彙の種類が違ってくるだろう。

私たちは調査結果を見たときに、どちらかというと「課題」の方に目がいつてしまいがち。しかし「成果」にもっと注目し、なぜこういう成果が生まれたのか、という点を大事にしたい。「この授業でいいんだ」という自信をもってほしい。特に「話すこと・聞くこと」の指導事項で「意図を明確にしながらか計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること」を身に付けることによって、話し合った結果の価値が生まれる。その成功体験が、言葉を紡いで友達とコミュニケーションを図りながら問題解決していく素地をつくっている。その学びを振り返って理解していくことが大事である。それが今、全国の教室で充実してきているのだろうと感じる。

「読むこと」も文学的文章を「登場人物の心情について描写をもとに捉えること」、「物語の魅力について人物像、情景、物語の展開から自分の考えをまとめること」という指導事項ができてきている。お話を読んで身近に感じて、自分の経験に結び付けながら考えていくことは小学校の過程ではかなりうまくいっていることが分かる。ただし先生の解釈を一方的に聞くということにならないように留意して、児童自らが、自分の解釈にたど着き考えをまとめるようにしていく。課題として挙がっているのは、「考えを形成」すること、そこから派生してどのように「表現を工夫」していくのかということにも留意していきたい。

このような調査は、児童がペーパーテストの問題文を読んだときに、「ああ、こういうことを答えればいいんだな」とすぐに認知できる児童は、その学習過程をイメージして問題が解ける。しかし、「うん？」と思ってしまう児童は、そもそもその学習経験が乏しいと、考える手がかりがないので、その状況を思い浮かべるまでに時間がかかってしまう。つまり、いろんな経験をたくさんしている、「あっ！あの学習のときと同じだな」となれば、そのときの知識・技能が働いて解答を進めることができる。

そうなると、いくつもの種類の「言語活動」を経験しておく、それを結び付けて、「あっ、これはあのときの知識が使えるな、考えたな」となる。いろんな場面で働くことで、応用する、適用する範囲が増えていくということになる。

四 実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿を目指す指導

「個別最適な学び」や「協働的な学び」は、昔から行われてきた。それが今回、キーワードとして出てきたのは、「子供を主語」にするという視点で捉え直すということである。先生がお膳立てするのではなく、子供自身が「自分はこう学びたい」「Aさんと対話したらうまくいったから、今度もそのやり方でやってみよう」という思いを経験知として積み上げていけるように、先生が伴走する役割をしていくことを大事にしている。

個別最適な学びは、子供を主語として、学習過程を作るものである。子供によってルートや課題を変えることはこれまでも行われた指導である。しかし、ただ活動させるのではなく、子供が自分で選び取り、学習していく様子を見守ることが重要である。もし間違った選択をしたら、子供が自ら調整できるよう、より良く導くことも指導である。

協働的な学びは、主体的・対話的で深い学びが生まれる。どちらも成り立つことで学びが深まる。「友達とやれば楽しい」がゴールではない。二人でやるということは、その学び方を選んだ責任が発生する。仮に自分が選んだ学習方法で上手くいかなかった場合、その経験を次の学びの始まりとすることが重要である。

学習過程の中でトライアンドエラーを繰り返して、子供の学びの感覚が変わっていくような支援が求められる。指導事項と目的を子供も教師も理解をした上で学習させる。教師の支援もそこが根本と言える。

五 学習評価の改善の基本的な方向性

学習評価は指導の裏返しである。よって、改善の基本的な方向性として次の三つが挙げられる。一つには、児童生徒の学習改善につながるものにしていくことである。二つには、教師の指導改善につながるものにしていくことである。三つには、これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくことである。

学習評価の基本的な考え方としては、子供が自らPDCAサイクルを回せるようになることを目指す。自分で自分をコーチングできる自立した学び手を育てたい。そのために、子供には、「学び方も学んでいる」という自覚をもたせる。教師自身もうまくいかなかったときに、「なぜだろう」と考えることも欠かせない。

今、次期学習指導要領については、論点整理をしているところである。今回のテーマにある「小・中・高をつないでいく」ための見通しを立てることで、三つの大きな柱が実現していくだろうと思っている。より良い明日をつくるために、教育改革を皆で進めていきたい。

◆記念講演Ⅱ◆(要旨)【トークネットホール仙台】

東北大学加齢医学研究所教授(医学博士)

川島 隆太 氏

演題 「脳を知り 脳を育む」

一 脳の基本構造と前頭前野の位置づけ

脳についての最低限の知識を共有したい。脳の中の大脳は大きく四つの領域に分かれる。前頭葉(体を動かす)、頭頂葉(触覚情報を扱う)、側頭葉(音を聞く)、後頭葉(物を見る)であり、場所ごとに異なる働きを担っている。「前頭葉」の前方に広がる領域が「前頭前野」。ざっくりいうと「物を考える仕事」をしている。具体的には、記憶、学習、理解、推理推測、我慢、注意、判断などが前頭前野の働きによって生まれている。

また、スキヤモンの成長曲線と脳の発達も似ている。運動や五感(見る・聞く・触る)に関わる脳の発達は、生まれてから概ね5歳頃までに急激に進む。その先はゆっくりとした成長になる。だから学校に入る前の段階が非常に重要である。一方、脳科学でみると「前頭前野」は五歳頃まで一度急発達した後は、小学校の思春期の入り口までは非常にゆっくりと発達する。その後は、中学・高校・大学の時期に大きく発達が進む。この事実が「福音」だと思う。思春期から伸びるというのは、自分の努力しただけで脳が発達し、将来を決めることができるということ。非常に希望のあるデータである。「中学、高校をどう生きたか」「自分の生き様が自分の将来を決めるんだ」ということが脳科学のデータからも裏付けられている。

二 加齢変化と簡易チェック(情報処理速度・作業記憶)

大人の脳については、残念ながら年齢とともに衰えていく。最初に衰えるのは、「情報処理能力」。脳の反応が遅くなる。前頭前野の機能は20歳以降、年齢とともに機能低下の傾向が見られる。中年期以降に急激に低下する。20代と30代の集団の脳の働きを調べると、二十歳過ぎ頃から低下が進む。ただし、大脳の中で歳とともに機能が上がる場所が、一カ所だけある。それは知恵や知識を扱う場所。60代から80代がピークとなる。考える力は年々下がるけれども、知恵や知識でごまかしがきくだろう。

前頭前野の機能の働きは簡易テストで把握することができる。ここでは、参加者の脳テストの「お試し」をした。「情報処理速度のテスト」。(1から100までを声に出して数える。テスト)、「記憶容量のテスト」。(利き手で「グー・パー・チョキ」を繰り返しながら計算問題に答えるテスト)

三 前頭前野が働くことと「読む・書く・筆算」

もう一つ脳科学の大事な知識を共有したい。学校現場で常識のような現象として、「全く同じ教材・全く同じように教えているのに、学習の習熟に差が出てくる。その違いはどこにあるのか。」「頭の良し悪しでしようか」、
「集中しているかどうかでしようか」。脳科学では明解な答えとして、学習の成立に寄与しているのは、「学習中に左の前頭前野が働いているかどうか」である。実際に学んでいる最中に「脳が活発に働いていれば学習が身に付く」ことが分かっている。逆に全く同じこと(活動)をしているのに、脳の働きが低い人たちは、いくら頑張っても結果がついてこない。したがって「いかに適切に前頭前野を使わせるか」が重要である。では、「どんな活動が最も前頭前野を活発に動かすのか」。これについて研究を進めていくと、「黙読」の時も「音読」の時も、右脳と左脳が思いっきり働いていることが分かる。そして「書く」という時、手書きの場合も前頭前野が活発に働いている。計算問題の場合は、「筆算」と「暗算」を比べるとはっきりしている。筆算で書きながら解いているときの方が明らかに前頭前野の働きが高くなっている。書いた内容を記憶させたいときは、圧倒的に手書きを優先するべきである。漢字学習をしているときの脳の働きも同じだった。MRIで図ってみた。「書きながら覚えようとした時」と「見て覚えようとした時」とを比べると、脳の働きがまるで違うのがよくわかる。「書く」という行為そのものが、脳のトレーニングになっている。キーボードを打つという文字入力作業は、指先は動いていても、「考える」動作ではなく、単なる反射的な操作となっている。そのため前頭前野は活発には動かない。

四 前頭前野と「デジタルとアナログ」の関係

前頭前野を測定すると、パソコンやスマートフォン(以下、スマホ)で入力するときの脳は、ほとんど活性化しない。パソコンやスマホ・タブレットを使って作業していると、ほとんど脳は働かない。デジタル機器を使うと作業は速く進むが、脳の働きは低下している。「脳を育てる」という視点で見たときに、明らかに「手書き」の方がより活発に働いているというのが現段階での結論である。これがアナログの「書く」と、デジタルの「打つ(書く)」との決定的な違いである。便利さと引き換えに、脳の発達の機会を失っているといえる。さらに、スマホ等で動画を視聴している時は、前頭前野の活動が鈍く、学習動画であっても同様の傾向が見られる。スマホを使うこと自体が悪いわけではない。問題は、脳を使わない時間が長く

なるということ。スマホの映像を見ているとき、脳の前頭前野はほとんど動かない。つまりデジタル機器は、「脳を休ませる道具」となっている。うまく使えば、脳を休ませることになるが、使い過ぎると、「思考しない脳」をつくってしまう。これが一番の問題だ。

五 国語学習と前頭前野

「読む」と「書く」がどれだけ脳に良い影響を与えるか。手で文字を書く時に、脳の前頭前野が非常に活発に動く。手を動かしながら書く、次に何を書くかを考え、思い出し、構成していく作業は非常に複雑で高度な脳活動である。「読む」という活動も、非常に広い範囲の脳を使う。目で文字を追いつながら、頭の中で意味を理解し、音や情景を想像する。音読するとさらに聴覚野と運動野も働く。脳全体が活性化される。読書をする、脳の言語野や前頭前野だけでなく、想像や感情に関わる領域も活発になる。特に物語を読むときには、登場人物の感情を想像したり、場面を思い浮かべたりして、脳全体を使うことが分かっている。「読むこと」は、ただ情報を得るだけではなく、「想像力」と「共感力」を育てる活動になっている。

六 共感の脳同期、読書の効果、スマホ影響と学校での取組

脳科学の世界では、相手の気持ちを思いやるときには、脳の「額の中央」「側頭葉の前」「側頭葉の後ろ」のネットワークが使われている。そのとき「同じ気持ちを共有する」という反応が起こる。そこで、仮説が生まれた。「人と人が共感し合っているとき、共感の脳のネットワークの活動もシンクロする（脳と脳の波長が合う）のではないだろうか」というもの。そしてそれが事実であることを発見し、特許を取得した。

新型コロナウイルス禍の頃、リモート授業が行われたが、それで本当に人と人が分かり合えるのだろうか、シンクロするのだろうかと疑問があった。そこで「リモートグループ」と「対面グループ」をつくり、議論している脳の波長を調べたところ、非常に衝撃的な結果となった。「リモートで話している時の脳」と、「じっとしている時の脳」とは、同じレベルだった。つまりリモート中はほとんど共感が生まれていなかった。一方で「対面グループ」は、しっかりとシンクロしていた。リモートは「情報伝達」はできるが、「共感」はほぼ生まれなかった。教育現場で考えてみると、教育は、情報伝達ではない。教える側と学ぶ側のコミュニケーションのベースがあって信頼関係の上に成り立つもの。だからリモート授業は「分かった気」には

なるが、学びの本質は成立しにくいことが分かった。

七 読書と創造性

読書に関して別の実験データから面白い共通性に気付いた。創造的な作業をしているときに、「脳のどこが働くか」を調べてみた。左脳の前頭前野の下の方（言語操作の領域）と側頭葉（知識の格納）の部分がある。実はクリエティブなことは、これまでに獲得してきた知識を言語的に操作して頭に浮かんでいる。ここで注目したのは、この創造力を発揮する脳というのは、なんと読書をしているときと、この脳の活動とが、ほとんど重なっているという事実だった。そこで読書をするだけで人々の創造性が伸びるといふ仮説ができた。その後、ある企業から「社員の創造性を伸ばしてほしい」と依頼があった。そこで文庫本を一冊配布し一か月後に創造性テストを行った結果、読書したグループのスコアが20倍となった。「創造性」という一番身に付けてほしい力が付いた。今までその方法が分からなかったが、読書と関係づけることで明らかになった。直接的に「創造性の脳」に働きかけるといふ方法。自信をもって読書に取り組ませてほしい。

八 読書と学力、ICT機器と学力

仙台市教育委員会と連携し、約7万人規模の学力調査と生活習慣データを分析した結果、読書時間が長い群ほど各教科の成績が高い傾向がある。勉強時間が短くても読書をしていると成績が高い。逆に勉強時間が長くても、読書をしない子は成績が伸びにくい。さらにスマホやタブレットの利用時間が長いほど学力が低下する傾向。毎日2〜3時間勉強しても、長時間（4時間以上）スマホを使うと、全く勉強していない子供と同じ成績となった。そもそもスマホ使用によって、その分、勉強時間が減ること、睡眠時間が減ることも成績低下の要因。さらに、「脳内ネットワーク」の発達が止まってしまうというデータが出た。脳科学では、スマホを使っているときは、「寝ているのと同様同じ状態」で脳が働いていない。ただしスマホ使用が「毎日一時間未満」なら影響はほぼない。

ICTと脳の関係は、①短い時間、短い文の場面は有効。②深い学習や理解には向かない③長時間使うと脳発達の妨げになるという事実にも注意が必要。ICT機器は、使い方と時間が決定的に重要である。したがって「協働学習」では有効、「個別最適学習」には悪影響が出る可能性がある。

【文責 宮城大会実行委員会】

◆授業・協議会①◆「南光台小学校読むこと第二学年」

【单元名】思いうかべたことをもとに、お話をしようかいしよう

「みきのたからもの」

授業者 仙台市立南光台小学校 菊池陽実 先生

一 提案の概要

○物語教材の单元は、毎回同じ進め方で行った。「初発の感想↓物語の設定の確認↓場面分け↓あらすじ↓学習課題の検討」という流れで学習を進めることで、児童が見通しを持って取り組み、主体的に読む力を育てたいと考えた。

○全体で学習課題を設定する場面では、初発の感想で生まれた疑問から設定することで、自ら学びたくなる学習過程になるようにした。

二 質疑応答

Q 初発の感想を書く時間はどれくらい確保しているのか。

A 十五分程度とっている。繰り返し経験することで、児童から疑問がたたくさん出るようになった。一方で、どの疑問が学習課題として適切か見極めることが難しくなってきた部分もある。

Q 本時の中で、「どうしてみきは、たからものをひみつにしたのか」という気持ちを想像させることが難しい様子だった。

A 秘密にしたことを考えさせると、自分事に重ねすぎてしまい、「嘘だと言われる。」「信じてもらえない。」という考えになってしまった。そのため、挿絵の横にかぎ括弧を付け足し、そつとしまった石を見たみきの気持ちを書かせることで、文学的価値について考えさせたかった。

三 指導助言

仙台市立北六番丁小学校長 伊藤 美穂 先生

○国語科の学習では、反復的・螺旋的に学力・資質能力を高めることが大切。今回の学習では、ゴールイメージをしつかりもった上でカリキュラムデザインされていた。

○初発の感想から出た疑問を基に学習課題を決めることは、児童の学習意欲を高める上で効果的だった。

○全单元で児童の疑問から学習課題を決めるのではなく、適切かどうか見極めながら挑戦する必要がある。

○本時の授業でみきの心情を考えるには、場面ごとに押さえてきたことを振り返らせ、最後の場面だけではなく、「見送った」や「宇宙飛行士になりたい」に焦点を当てる等、叙述に立ち戻る視点があるとよい。低学年では、学び方の基礎をつくり、正しい型を学んだ上で、学習を広げていくことがよい学びにつながっていくため、螺旋的に学習活動を取り扱うことを心掛けていきたい。

【文責 有馬 杏夏】

◆研究発表第一分科会◆「話すこと・聞くこと」

【研究主題】求めて関わり自他の学びの充実を目指す話し合い

提案者 西東京市立けやき小学校 前田 元 先生

一 提案の概要

○本実践では、三つのねらいで指導をした。①児童が身に付けたい力を意識し、主体的に取り組むこと ②学習活動において、自ら考えをもち、多様な考えをもつ人と関わり、新たな考えをもつこと ③獲得した言葉の力を日常生活に活用し、言語生活を豊かにすること

○そのために、複数回の話し合いの設定や「話し合いの例（モデル動画、実演等）」の提示や活用、「資料（話し合いボード等）」の活用等の手だてを講じた。その結果、話し合いの「コツ」や「構え」を意識しながらよりよい話し合いのために学びを積み重ねることや、身に付けたい力を意識して話し合うことができるようになってきた。

二 質疑応答

Q 一つの单元の中での複数回の話し合いの意図を知りたい。

A 大きな同じテーマの中での違う話し合い（話し合いをして解決していく場合）は同じグループで行い、小さな話題や話題をシェアする場合は変える。

Q 教師からの評価や場づくりをどうするか。

A タブレット動画を全グループ分撮影して確認する。自己評価の資料としても使える。短い話し合いをテンポよく行う。動画が短い分教師の振り返りもしやすい。話し方はその場に応じて使い分けるべきものである。グループ編成は五人以上にはしない。

Q 必然性のある話題の設定、国語での学びをどのように児童の成長につなげていくか。

A どんな話題をつくるのか、研究の中で一番苦心するところ。高学年では、条件に合うかどうかの話し合いになるもので設定している。

三 指導助言

武蔵村山市教育センター 参与兼教授 小野江 隆 先生

○話す聞くの実践は、日々の学習の中で取り入れることができる。伝え合って学ぶためには、理由・根拠を明確に持つことが大切になっていく。試行錯誤しながら最適解を求める力を養いたい。

○国語の单元をプロジェクト的に扱っていく。学級・地域・社会の実態に応じて、教師がテーマを置き換えてあげると、唯一無二の单元名ができあがる。

【文責 大坂 亜希】

◆授業・協議会②◆「南光台小学校 読むこと 第四学年」

【単元名】登場人物の気持ちの変化を読み、考えをまとめよう
「ごんぎつね」

授業者 宮城教育大学附属小学校 千葉 廣 先生

一 提案の概要

○今までの読みの方略を生かし、登場人物の気持ちの変化に迫った。読みの方略は活用を促すため「国語のお道具箱」として教室に掲示した。
○学級全体で設定した単元を追究し、最終場面の「問い」と各場面の「問い」を基に、中心人物の気持ちの変化を追究する単元を構成した。

二 質疑応答

Q どのように問いを設定したのか。

A 始めに、子供たちが考えたい最後の一文に関わる「問い」を設定し、その問いを考えるために手掛かりとなる問いを場面毎に考えた。

Q 最後の一文に関わる発問に、「ごんの思い」を入れた意図は何か。

A 全体で最後の一文に関わる問いを考えた際に「青い煙」からは「兵十」だけではなく「ごん」の思いも伝わるとの子供の発言があったため。

Q 最後の一文に関わる話合いで「爽快感」と「嬉しみ」との発言は取り上げたが、「ごんの魂」という発言は取り上げなかった。その意図とは。

A 最後の一文における解釈の広がりや深まりを期待して、他の場面の情景描写と結び付けて解釈を語る児童の発言を先に取り上げた。

Q 考えを深めるために、普段どのようなように先生が切り込んでいるのか。

A 一人一人の考えを聞き合える小集団で、学びが深まることを期待した。本時では深まりを生む教師の切り返しや焦点化が必要だった。

Q どうしたら「自分の思いを伝えたい。」と思う児童が育つのか。

A 始めは一人で声に出して読むことが大切。気付いたことを教科書に書きこませたい。気付きが増えたと、伝えたい思いが膨らんでいく。

三 指導助言

大崎市立第三小学校長 滝野澤 清史 先生

○自分の思いを生き生きと語り合えるクラスである。読みの方略を含めたこれまでの「国語のお道具箱」が、子供たちにぴったり合っている。

○最後の一文に「ごんの思い」を入れたために、本時ではズレが生じた。

冒頭の一文につなげるなら、「兵十の思い」に限定した方がよかった。
○最初の「どの言葉から伝わってきた？」との投げ掛けは、大変よかった。しかし、個々の学びから生じた多様な読みが、全体での話合いで深まりが見られなかった。そこで教師の役割が大切。「嬉しみ」という言葉が出てきたときに「魂」が出てきた。同じ部分を読んで違う読み取りが見られたら、学級全体に聞き返すべき。「どう考える？」と、聞き返すだけでも、深まりが生まれたはずである。【文責 村上 優子】

◆研究発表第二分科会◆「話すこと・聞くこと」

【研究主題】伝える意欲と自己調整力を引き出す学習デザイン

〓 個別最適な学びを支える教師の関わりと学習環境の工夫〓

発表者 仙台市立愛子小学校 八俣 ほのか 先生

一 提案の概要

○児童の学習方法や進度の多様性を踏まえ、自分に合う学び方や活動形態を選択・調整できる学習デザインを構築した。「宝物を紹介する」ために、ICTや板書で進捗を可視化し、児童が「学びの手引」や豊富な学習材を主体的に活用し自律的にゴールを目指す環境を整えた。

○一斉指導を導入・共有・終末に精選して個別学習の時間を確保し、教師は進捗を把握しながら個々の実態に応じた的確な助言を行った。評価では成果物のみならず、学習計画に基づく自己調整の過程を丁寧に見取することで、伝える力と自己調整力の双方を育成した。

二 質疑応答

Q 学習を委ねる上での工夫と成功の要因は何か？

A 単元の全てを任せるのではなく、最も思考力が必要な時間に絞った点である。学習ゴールを明確にし、考えを整理するためのガイドであるワークシートを用意したことが、確かな力の育成に繋がった。

Q 板書とデジタルの使い分けは？

A 一目で全体の流れや状況を俯瞰できる板書で意欲を高めつつ、デジタルの効率性を活用した。手書きによる知識の定着も重視し、双方の利点を融合させて多角的に学びを支えることが重要である。

三 指導助言

仙台市教育センター 指導主事 立花 卓 先生

○「学びの手引」で学習内容を示し、見通しをもって自律的に進める仕組みを構築している。また、明確なゴール設定が主体的な学びの土台となっている。

○動画やクラウドを活用し、「いつでも・どこでも・誰とでも」学べる豊かな学習環境を整備している。協働の有無を児童自身が選択できる授業展開を実現し、実態に応じた個別最適な学びを可能にしている。

○一斉指導を短く精査し、個別学習中は「活動の見取り」と「思考を引き出す声掛け」を重視している。学習の各段階(前・中・後)に応じ、学習方略の自覚や自身の変容を促す適切な介入を行っている。

○今後は「話す順序」など具体的な助言ポイントを明確にし、思考の妥当性をより深めていくとよい。目標に対する振り返りの姿をあらかじめ想定し、児童が学びの意義を実感できる価値づけを行うことが、資質・能力の確実な育成につながる。【文責 佐藤 隆太】

◆授業・協議会③◆「南光台小学校 読むこと 第四学年」

【単元名】つながりを見つながら読み、おもしろいと思ったことを話し合う
おう「友情のかべ新聞」

授業者 仙台市立南光台小学校 櫻井 千紘 先生

一 提案の概要

○高学年で目指す「日常的に読書に親しむ児童」につなげるため、中学年で「物語が持つ面白さを自分で見付けられる力」に重点を置いた。
○ミステリーの楽しみ方を本単元で習得することで、今後の日常的な読書活動においても、ミステリーというジャンルをすすんで読み、「推理」や「伏線」などを楽しみながら読めるよう目指した。物語にある「しかけ」を楽しみ、それが登場人物の気持ちの変化とつながっているという読み方ができると考えた。

○本授業では、どのような出来事があったから二人の関係が変化したのか、という視点を大事に想像させることをねらいとした。

二 質疑応答

Q 本単元の授業の流れや見通しについて詳しく教えてほしい。

A 読み聞かせボランティアにミステリーの本の読み方を何冊か紹介していたとき、これからミステリーのお話に挑戦していくことを伝えたさらに、様々なジャンルの本を読んでほしいとの思いから、アプリ「パドレット」を使用し、自分の読んだ本を紹介し合い、最終的には、ミステリーの本を読んで、レビューという形で感想等を書き込めるようにするということを単元スタート時に提示した。

Q 毎時の振り返りで意識していることはあるか。

A 本単元においては、事前授業で、物語が面白かったのか、授業が面白かったのか、曖昧になってしまったので、本授業では場面と場面のつながりの面白さや設定の面白さに焦点化し、振り返り活動を進めてきた。

三 指導助言

仙台市立東長町小学校長 田中 孝子 先生

○「目標達成」への過程を大切にした単元設計により、ゴールイメージ（「何ができるようになるのか」）を明確化させることができる。

○選択・工夫したり、「試行錯誤」したりする学習場面の設定を考えることで子供が課題に立ち止まり、悩んだり葛藤したりすることで考えが深まる。

○学びを振り返り、「次につなげたいことは何か」を考える学習場面を設定することで何ができるようになったのか、学びを自覚化（メタ認知）させることができる。

【文責 平塚 和美】

◆研究発表第三分科会◆「書くこと」

【研究主題】子供を主体とした学びを目指した国語科「書くこと」におけるICT活用の実践

提案者 一関市立東山小学校 小木津 祐菜 先生

一 提案の概要

○本実践では、作文が苦手と感じている児童に対して、書く力を高め、主体的に学び、豊かに表現する力を高めることに重点を置いて指導をした。

○そのために、ロイロノートの熊手チャートを学習計画兼振り返りカードとして使用し、学習の見通しをもたせ、単元で身に付けさせたい資質能力を意識させた。また、対話や協働的な学習場面を積極的に取り入れ、ロイロノートで意見の構成カードを作ること、文章を書くことへの抵抗感を少なくした。

二 質疑応答

Q 高学年では、話し合いを通じて子供たち自身で単元の進め方やゴールを作っているのか。

A 前単元で紙上討論会を開き、子供たちも楽しんで前向きに意見を交流している。子供たちから出た進め方を教師が一覧にして考える。

Q 共通のゴールについて、きちんとおさまればよい、そこがしっかりしていないと話し合いの基にならない。そのように作っているか。

A 単元目標を一目で見えるようにロイロノートに記して共有する。但し、教科書の表現が理解できない児童のために、言葉を変えたり、さらに下位の子は上から新しい付箋を貼って、さらに分かりやすい言葉にしたり、写真や音声カードを貼っている。

三 指導助言

二戸市立金田一小学校長 高橋 聡子 先生

○主体的・対話的な学びの重要性、ICT活用の充実に視点をおいて取り組まれていることが、まさに「子供を主語にする」ということ。『一人一人の子供を大切にする』という理念は、昔も、今も、そして今後変わらない。ここで、『指導者の視点』で考えていた授業を、これからはもっと『学習者の視点』で考えていくことが大切である。

○ICT活用のよさは、書くことの苦手な児童のストレス軽減、グラフなどをつかって自分がつくりたいものを実現しやすいなどのよさがある。子供を主語にした学びにおける教師の役割、国語科におけるICTの活用の可能性について考え、探究していくことが求められる。

【文責 柏葉 晃大】

◆授業・協議会④◆「南光台小学校 読むこと 上学年」

【単元名】資料を用いた文章の効果を考え、それをいかして書くこと
「自然環境を守るために」

仙台市立北中山小学校 森直央 先生

一 提案の概要

- 学びの系統性を考え、「書くこと」を、一年を通して指導事項を意識して組み立てた。各単元で既習事項を活用して書くように意識させた。
- 本単元では、図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるよう書き表し方を工夫する力を育てていく。
- 取り扱う資料は、教師が精選した資料の提示とした。教科書のモデル文も活用した。学習過程に応じて、モデル文を分析し、児童が指導事項に示された書き表し方の工夫に気付かせ、文章に生かすように指導した。

二 質疑応答

- Q この単元は「固有種から教えられること」と複合単元扱いだったのか。
- A 前単元「固有種から教えられること」の目標は、筆者の説明の工夫を読み取ることだった。今回は、意見文を書くための単元である。話題としては環境問題としてつながるが、複合単元扱いにはしなかった。「固有種」の話題から、環境問題に触れ、今回の単元に入っている。
- ※資料について

- 資料を児童に提示するタイミングに検討の余地がある。三つとも事前提示し、主張を固める時間を作ることも一つの手だてである。
- 読み取りやすくする手だてとして、資料と主張が結びつく大きなワークシート（文章構造の全てをまとめたもの）が非常に良かった。
- 資料から主張をまとめる際に、生活経験に差が見られた。その差を埋めるために紙類や生ゴミ、プラスチック等、選んだ分野ごとに児童同士で話し合い、自分の主張を見直す時間があっても良かった。

三 指導助言

仙台市立新田小学校教頭 早坂美幸 先生

- 書く力を段階的に付ける授業提案だった。児童が身に付けた力を使い、学習目標に到達できるよう工夫されていた。資料を精選したこと、全員が意見文を書くことに意識が向いていた。モデル文から主張につながる根拠を丁寧に確認したことも良い。ワークシートが工夫され、資料と主張のつながりが可視化でき、さらに構成メモの土台となった。
- 今後各グラフの特徴や、仙台市のグラフから良さを考えることで資料を選ぶ力を付ける必要がある。さらに、資料を使う際の言葉の書き方も指導していくことが大切である。

【文責 武田由香】

◆研究発表第四分科会◆「書くこと」

【研究主題】ICTで広がる！情報を整理して書く授業づくり

発表者 鹿角市立柴平小学校 佐々木和佳 先生

一 提案の概要

- ICTで児童の思いを可視化し、効率的に整理・表現することで、より確かに「書く力」を高めることができると考え本主題を設定した。
- 伝えたいことを明確にするために、ロイロノートやGoogleドキュメントを活用し、集めた情報を整理して報告する文章を書かせた。
- 作品のイメージを広げて自分の思いを分かりやすく伝えるために、ロイロノートやキャンバを活用し、表現を工夫して俳句を作らせた。
- 児童の書く力を向上させるための土台作りとして、「短作文」の実施や「言葉の宝箱」の活用、「家読書」と「一言感想文」を学校全体で取り組んだ。

二 質疑応答

- Q デジタル教材とアナログ教材をどう使い分けているのか。
- A デジタル教材は、準備が簡単で時短であることや、シンキングツールなどはツール自体の切り替えをしながら、情報整理・分類したり焦点化したりできる良さがある。文章を読む学習では、紙にプリントして、線を引きながら読ませるなどしている。

Q 児童のデジタル操作能力や理解度に差が生じる課題にどんな手だてがあるか。

A 中学校区でタブレット活用スキル表を作成し、学年の発達段階に応じた活用能力の向上を図っている。

三 指導助言

鹿角市立花輪小学校長 山口史人 先生

- 実践の主題設定は、書くことが苦手な児童が「書きたい」という思いを高める点でシンプルかつ効果的である。ICTによる「見える化」で、情報整理を助け、その場での活用や保存を可能にしている点が優れている。

○視覚化と効率化により、児童がイメージを広げやすくなり、限られた時間の中で、言葉による見方や考え方を吟味しながら短い言葉で表現する力が育まれている。

- 短作文や俳句作り、言葉の宝箱の活用といった日常的な取り組みは、書く力を向上させる土台作りとして重要である。ICTは、児童の「書きたい」という思いを引き出す強力なツールとして機能している。

【文責 高橋麻衣子】

◆授業・協議会⑤◆「南光台小学校・話すこと聞くこと 第六学年」

【單元名】目的や条件に応じて話し合おう

「みんなで楽しく過ごすために」

授業者 仙台市立錦ヶ丘小学校 長谷川 菜々 先生

一 提案の概要

○本実践では、「小学校六年間の感謝をおうちのの人に伝えるために」という議題で、各自が主張、理由、根拠を明確にしたうえでグループでの話し合いを行い、異なる立場からの意見の素となる理由を尋ね合うことで、互いに考えを広げたりまとめたりすることができるようになる。

○指導事項にはない「深める」をめあてに据えたのは、大会の研究主題にある「小・中・高をつなぐ国語教育」の視点に沿って考え、中学との接続を意識したためである。互いの考えを吟味し合いながら、納得感のある合意形成を図る力を着実に高めることをねらった。

二 質疑応答

Q 四月からの学習の積み重ねを具体的に教えてほしい。

A 低学年からの「話すこと」「聞くこと」の指導事項を基盤とした話し合い活動を継続した。指導事項の系統性を視覚化することで、児童が身に付ける力を自覚できるようにした。

Q 目的と条件は授業者が決めたのか。

A 議題の設定は児童の主体性に委ねた。教科書の例を用いて目的と条件を確認した後、本時の話題を設定し、改めて活動の目的を検討した。

Q 生成AIをどのように使ったのか。

A 話し合い活動の前段階として、生成AIによる仮想インタビューを実施した。一言のみの応答では対話が停滞する一方、感想や理由を添えることで会話が継続する特性を、児童は実感を伴って理解した。適宜、授業者が指導・助言を介在させることで練習の質を向上させ、主体的な対話の重要性を学ぶ貴重な機会となった。

三 指導助言

仙台市立中野栄小学校長 笠原夕 先生

○思考ツール活用が目的化することなく、特徴を押さえた効果的な運用により、思考の可視化が図られた。児童の心理的安全性を確保する教室環境整備指導を行ってきたことも、ねらい達成へと導いた。目的意識が共有され、議論の視点が揃っていた点も見事である。「条件がOKなら目的を意識しよう」という授業者の的確な助言が、話し合いの質を高める要因となった。

【文責 日向 朱佳】

◆研究発表第五分科会◆「読むこと」

【研究主題】子供が自然と問いをもち、主体的に学び続ける姿を生む

「逆向き設計」での授業作り5年「たずねびと」の実践を通して」

提案者 札幌市大倉山小学校 黒崎 健治 先生

一 提案の概要

○本実践では、「戦争文学なのにプラスの印象を受けるのはどうしてか。」という問いから、「綾の変容が関わっているのではないか。」という見通しをもち、変容のきっかけについて探究する活動を通して、物語の全体像を捉えていくことをねらった。

○「逆向き設計」の考え方を基に、評価を明確にし、問いと一体的に授業を作ること、ねらいに合った言語活動を設定できるようにした。

二 質疑応答

Q プラスとマイナスという言葉を選んだ意図は。物語を二項対立で語ることではないのか。

A 二項対立を作り出す意図はない。物語から受ける印象はプラス寄りかマイナス寄りか、という投げ掛けから、児童が立場をはっきりさせ、叙述に着目するきっかけとすることがねらいだった。

Q 戦争文学を取り扱う際には気を遣うことが多いが、どのような雰囲気での授業だったのか。

A 初読の際はしっとりとした雰囲気から始まった。読後感を問うた場面では、議論が白熱した。「綾の変容のきっかけ」について、児童自らが視点を見いだして、協働しながら探究する場面では、互いに意見を交わしながら、活発に取り組んでいた。

三 指導助言

札幌市立東山小学校長 片山 俊明 先生

○「授業設計」において、学習終了時の児童の姿を想定し、評価を明確にする取組は、真新しい提案ということではない。しかし、「論点整理」に示される「多様性の包摂」を考えると、一人一人の学びの姿を想定することは、重要な授業改善の視点であり、意義のある提案である。

○多様な児童全員がスタートラインに立ち、単元のゴールをイメージできる言語活動を設定したい。改めて、教材研究の大切さを確認したい。

○例えば、文章構造図に書き表す等、指導者として教材理解に十分時間をかけることが、児童に適切な言語活動の設定の近道にもなる。

○言語活動の設定においては、「相手意識、目的意識を明確にものごと」「指導事項を習得できる活動であること」「教師も「その活動に『わくわくできる』活動であること」等に留意し、指導と評価が一体化できる「授業設計」を心掛けたい。

【文責 宮城大会実行委員会】

◆授業・協議会⑥◆「南光台小学校 読むこと 第六学年」

【單元名】作品の世界を想像しながら読み、考えたことを伝え合おう
「やまなし」

授業者 仙台市立南光台小学校 吉田 葵 先生

一 提案の概要

○「やまなし」は、額縁構造と宮沢賢治独特の色彩感覚豊かな表現で描かれている。資料の「イーハトーブの夢」と併せて読むことで、賢治の生き方や考え方を踏まえて作品世界を捉えることができる。

○今回は、C(1)オの「考えをまとめること」を目標に加え、児童同士が話し合い、主体的・対話的に読みを深める授業を目指した。

二 質疑応答

Q 生成AIを使った経緯を教えてください。

A 題名の意味を考えることは難しいので、自分の考えを持つ手だてとして利用した。AIから出た解釈については、反対意見を出しやすいという利点もあると考えた。

①話し合い・対話について

・日頃の指導が行き届いていて、積み重ねが感じられる。

・考えを合わせ、融合させるような話し合いが望ましい。グループで話し合い、叙述に立ち戻らせること、少数意見を全体に共有させること、キーワードの繋がりに気付かせること等を取り入れること等で、更に話し合いが深まる。

②学習過程について

・教室掲示からこれまでの学習の積み重ねが見て取れる。

・一時間目から題名についての読みをためていくと、児童の考えからキーワードを作り出すことができる。「命」「自然」などの単語で提示することで、考えを狭めてしまうのを防ぐことができる。

三 指導助言

仙台市教育局教職員課管理主事 相澤 遼 先生

○本時には「三つの生かす」があった。

・「問いを生かす」 児童の問いから授業を作っている。

・「二人一人の考えを生かす」 その他を挙げた児童の考えは、全体像をとらえる良い考えだった。「Aさんの考え分かる？」などと全体に問い掛けることで、考えを共有し深めることができる。教師の適切な介入により、より一人一人の考えを生かすことができる。

・「資質能力を生かす」 教室掲示・ワークシートもこれまでの学びとのつながりを生み出した。これまでの学びが効いた授業であった。

【文責 大竹 有美】

◆研究発表第六分科会◆「読むこと」

【研究主題】「読むこと」における深い学びの創造

読みを「充実」「深化」させるための授業実践を通して

提案者 気仙沼市立津谷小学校 大場 怜也 先生

一 提案の概要

○本実践では、文章を正確に読み取る「充実」と、筆者の考えを深く捉え自分の考えを形成する「深化」とを往還させる学習過程をつくることをねらった。

○まず音読や叙述に基づく発問を通して、児童が文章の内容を正確に捉えられるようにする。

○ペアやグループでの話し合いを取り入れ、互いの読み取りを比較・関連付けることで多様な考えに触れる機会を設けた。そして、最後に、自分自身の考えへと立ち返る時間を設けることで、学びを自分のものとして再構築できるように仕組んだ。

二 質疑応答

Q 言語活動の設定は、何のためまた、誰のためにされたのか。

A 意見文を書くことを最終目標にしてきた。まとめたものを家族や友達に伝えるというような相手を意識させた。

Q 音読でどのようなことに気付かせたかったのか。そのために、どのように焦点化してきたのか。

A 発問に迫る音読をした。筆者の伝えたいことに迫るよう何度も繰り返し読ませた。

Q 大会のテーマである「あらゆる人たちの学びを大切にする」を実現するために大切にしていること。

A 相手の意見は否定しない。友達の考えを残し、自分にはない意見を与えてくれたことに感謝の気持ちを持つことを大切にしている。

三 指導助言

気仙沼市立松岩小学校 元校長 菅原 理恵 先生

○「学ぶ」とは何か。よりよく変わることを。教師として、児童の姿がよりよく変わることを思い浮かべて、授業を構築していくことが大切。脳における学習の分野を司る前頭前野を働かせるという意味でも、音読はとても大切。その活動で子供たちが何を学び、何を身に付けたのかを実感できるものであること。発問は、何を読み解き、何を考えさせたいのかをしっかりと明確にすること。授業実践の一つ一つに教師の力や誠実さが明らかになる。日常である授業を通して、子供たちの人生を楽しく幸せなものにしていくことが求められる。

【文責 安食 咲智】

◆授業・協議会①◆〔富沢小学校 書くこと 第三学年〕

【単元名】せつめいのしかたに気をつけて読み、それをいかして書く
 「紙コップ花火の作り方 おもちやの作り方をせつめいしよう」

授業者 仙台市立富沢小学校 小荒井 香菜 先生

一 提案の概要

○児童自身に「分かりやすい説明書を作りたい」という思いを抱かせてから説明書を作成させた。その後、友達の説明文の良いところを見つけて活動を通してレベルアップさせようと指導計画をたてた。

○授業については、教科書のモデル文の「前書きと材料」を読み、説明の仕方や工夫を考えてから、実際に書くというように「読む」と「書く」を交互に行うスパイラル型にした。さらに、生活科「うごくうごくわたしのおもちや」と関連したカリキュラム・マネジメントを行うことによって、相手意識を持たせるようにした。

二 質疑応答

Q 「ぐるぐる日記」とは何か。

A 朝学習のときに、班ごとに指定された言葉を使って短文作りをしている。言葉の意味を正しく覚え、活用能力を付けることがねらい。

Q 三人のグルーブは、どのような意図で組んだのか。

A 得意な子（ピンクの付箋）、ちよつと苦手な子（青）、苦手な子（黄や緑）という構成にした。発表の順番を青、黄、緑、ピンクの順にすることで、発表が苦手な子供たちも発表の仕方やプレゼントする言葉を教え合うことができ、それが支援のとなっていた。

三 指導助言

仙台市立長町南小学校長 三浦 洋太 先生

○友達の文章で良かった言葉を付箋に書き、理由を添えて発言すること、考えを広げる方法として効果的であった。また、「ピカ一言葉」を発表する場面では、教師が言葉をつなぐ質問や動作化をさせることによって、語彙を増やしていた。その際、「大きさや長さなど説明に必要な言葉」と「おもちやを作ってみたくなる言葉」で分類させれば、「作りやすさ」や「分かりやすさ」を効率的に意識させられたのではないかと。

○国語の授業とは、母語「日本語」とことん向き合う場。豊かな語彙があれば、外言にも内言にも使えるので、言葉の力は生きる力であるとも言える。言葉の力には、思考する力、認識する力、表現する力、想像する力、伝達する力があり、本時は伝達する力。

○「読んで分かる」ということは、①内容面②形式面③解釈④熟考・評価である。この①②③が本時の授業に織り込まれていた。

【文責 村上 智佳子】

◆研究発表第一分科会◆〔話すこと・聞くこと〕

【研究主題】学びに向かう力、人間性等」の充実を目指した児童の育成
 「話すこと・聞くこと」における、
 子供の主体性を引き出す言語活動の工夫について」

提案者 大鰐町立大鰐小 對馬 敬紘 先生

一 提案の概要

○本実践では、「話すこと・聞くこと」の二つの実践を通して、特に「学びに向かう力、人間性等」の充実を目指し、「主体性を引き出す言語活動の工夫」「指導と評価の一体化」を意識した授業づくりを行った。

○五年生の実践で設定した「町の交流センターに推薦文を置く」のように、児童に単元のゴールを示すことで、最後まで意欲を継続させ、主体性を引き出す手だてとなった。

○音声言語をICT機器や評価メモ等を活用して目に見える形で残すことで、児童の様子や変容を把握でき、確かな評価となった。

二 質疑応答

Q 子供の主体性を引き出すための単元のゴール設定は、教師がはじめに提示したのか。それとも子供がゴールをイメージして出したのか。

A 二年生…夏休みの報告をすることを伝え、「誰に聞いてもらいたい？」と問いかけたところ、「学校の先生たち」と答えたためそのように設定した。五年生…子供たちから「施設に置きたい」と出ないので教師が提示した。

Q 主体性に焦点を当てた内容だった。2年生と5年生、それぞれ児童たちはどんな内容を話したのか。

A 二年生…旅行、いところが遊びに来た、家族でお出かけ
 五年生…りんご、スキー場、温泉など町の特産や、自分にかかわりのある場所（祖母が経営する喫茶店）など。

三 指導助言

平川市立小和森小学校長 工藤 良信 先生

○「話すこと・聞くこと」は人間性の土台であることから、児童の学びやすさを重視した、主体性を引き出す言語活動の工夫が求められる。
 ○具体的には、児童が自ら考え、ゴールの意味を理解するような場面を設定したり、質問することで新たな気付きを得たりしながら、聞く力を充実させていきたい。

○自己評価等の振り返りによって自己調整力を育て、成長を実感させる必要がある。これらを校内で共有し、系統的な言語活動を設計していくことが肝要だ。

【文責 前田 優】

◆授業・協議会②◆「富沢小学校 読むこと 第三学年」

【單元名】想どうしたことをつたえ合おう「モチモチの木」

授業者 名取市立増田小学校 佐々木 眞央 先生

一 提案の概要

○登場人物について、複数の叙述に基づきフリップで紹介する言語活動を設定した。友達との交流を通して、学びの深まりの実現を目指す。

○学習形態を各自が選択する「マイスタディタイム」を設けることで、児童の主體的な学びを高める。「モチモチの木」と「児童が自分で選んだ物語（斎藤隆介著）」を並行して読み進めることで、学びの連続性と定着を図る。

二 質疑応答

Q 性格の捉え方の授業における学習の焦点はどちらに当てていたか。

A 視野を広げ、多くの本と出会う経験をさせるため、複数の本の叙述を扱うことを重視した。同じ叙述でも性格の捉え方が違うことへの気付きも大切だが、授業後、子供たちが読書意欲をもてる学習にしたい。

Q フリップ活動の相手意識はだれが対象だったのか。

A クラス内での活動をイメージしていたが、より深めるために、他のクラスや、廊下、図書館など複数の場所に掲示することで、その成果を広く共有することを検討している。

Q 「精査・解釈」の力を高めるためにとった手だては何か。

A 個別の支援として、苦手な児童には個別に寄り添い、叙述から性格を引き出す手助けをし、交流の場では、単なる紹介に留まらず、共通点や相違点の「理由」を深掘りさせるための発問や声かけを行っている。

三 指導助言

利府町立利府第二小学校教頭 近藤 ゆき 先生

○一年生から六年生の物語文の系統性を具体的に整理して把握した上で授業に臨んでおり、教材を使ってどんな性質や力を育ててきたかという点に焦点を当てて取り組んでいた。「モチモチの木」の教材文と「自分が選んだ物語」の学習方法を交互に行うことで、学んだ資質能力を活用できるような授業構成になっている。

○「マイスタディタイム」は、これまで授業スタイルとして浸透させてきた土台があったからこそ効果を発揮していた。交流活動においても指導の連続性を感じられた。交流の後に、自分で言葉を書き加える姿は、子供が生きた力として語彙を獲得した瞬間であり、交流を通じて知識が言語体系に組み込まれた表れである。

【文責 泉山 唯】

◆研究発表第二分科会◆「話すこと・聞くこと」

【研究主題】伝える内容を明確にし、よりよい言葉の用い方を考える交流の在り方

提案者 大阪市立中央小学校 倉本 宏美 先生

一 提案の概要

○本実践では、互いの考えやその理由、根拠等を交流することによって、自分の考えを変容・発展させながら課題の解決へ向かっていく姿を実現したいと考えた。

○そのために、同じ考えを持つ者同士でペアやトリオになって交流させ、交流のポイントを示した。自分のニーズに合った交流相手を見付け、文章を読み合い、聞き合い、目的を明確にした活動ができていた。ねらいにせまるために交流活動が効果的に働いたことで内容の理解が深まったことが見取れた。

二 質疑応答

Q 学習者の相手意識という話があったが、クラスの友達だとすでに知っているという意識が出てしまう。モチベーションを保つ方法などがあったのか。

A 学校の実態によつては他の学年と交流させたところもあった。しかし、生活経験の内容が一人一人違っているのをそこを聞いてほしくて交流させた。次回は他の学年等とも交流させたい。

Q 子供同士で文章を直し合っていたが、苦手な子同士になったときにおかしな文章にならないのか。

A 回数を積み重ねると、「この子とだったらうまくいく」という子を選べるようになってくる。回数を重ねることが大切。

三 指導助言

大阪市立中津小学校長 三辻 文子 先生

○交流活動では、自分の考えを発展させる利点を最大限に生かすため、学習者が目的意識や相手意識をもてるようポイントや、具体的な目的を明確に提示することが大切。また児童が交流方法を視覚的に理解できる工夫や、ルールの指導も必要である。

○主體的な学びを調整する力を育むには、探究的・主體的・個別最適な学びを通し、児童が自分を客観視し、交流相手を自分で考えられるよう導く指導が肝要である。振り返りは、次の学びに生かす書き方を指導し、教師の指導改善にもつながることを重視していきたい。

○最終的に、交流を通して一人一人が教科横断的な視点をもてるようになり、それが継続することが最も大切である。

【文責 阿部 美友】

◆授業・協議会③◆〔富沢小学校 読むこと 第三学年〕

【单元名】れいの書かれ方に気をつけて読み、それをいかして読もう
「すがたをかえる大豆」

授業者 仙台市立富沢小学校 吉田 しおり 先生

一 提案の概要

○本单元は、本文から筆者の説明の工夫を捉え、読み取ったことを生かして文章を書く、「読むこと」「書くこと」の複合单元である。

○児童は、「筆者の述べ方に注意して読む」ことを学んだが、その読みを生かして書くことに課題があった。そこで、「順序」に着目させた。書き手の意図に気付かせ、読みの段階で、書く活動につながる発問をしたり、構成メモを書かせたりすることで、課題を解決したいと考えた。

二 質疑応答

Q読むことの单元の中で、具体例の調べ学習をする際、どのように調べたり、教材と関連付けさせたりしているのか。

A並行読書を行った。筆者の工夫が、しっかりと食品と結び付くよう、工夫につながるページに青線を引き、ロイロノートに載せていた。

Q单元を通して、児童自身が、学びの深まりや自己の成長を実感できていると思うところはどこか。

A児童同士の対話で、相手を認める言葉が多く見られるようになった。児童のノートには友達の見解が書き足され、振り返りには友達のことを聞いて改めて考えたことが書かれている。授業の中で成長した足跡がノートに残っており、付箋の動きもロイロに残っているため、頑張った、賢くなったという、自分自身の変容が実感できている。

三 指導助言

仙台市立野村小学校長 及川 勝成 先生

○読むこと、書くことの系統性と連続性をスモールステップで結び付けることで、読みと書きがつながり、いざ書くときにそれが自然と活用できるようになるだろう。

○今回は、「順序」に絞ることで、気付いたことや、こうした順序で書きたい、という思いを理由付けできていた。その部分だけに絞って、連続させる、という構成がよかった。「読むこと、書くことを連動させると、児童がより分かりやすく、書きやすくなる」という考え方の実践は、これからもすばらしい試みとなるだろう。

【文責 笠原 真由】

◆研究発表第三分科会◆〔書くこと〕

【研究主題】子供が書く楽しさを実感できる授業づくり
～6年間を見据えた入門期の実践を通して～

提案者 鶴岡市立朝陽第二小学校 佐藤 聡美 先生

一 提案の概要

○本実践は、一年生の「書くこと」において、書く楽しさを実感しながら表現する力を育てることをねらいとした。

○作文指導に年間の学習を見通し持ち、その取り組みの一つとして「おてがみチャレンジ」という幼稚園の先生にアサガオについて手紙を書く活動を行った。

○活動の成果として身の回りのことを言葉によって伝えようとする姿、自分の伝えたいことに合わせた言葉を選んで書くこうとする姿が増えた。さらに、段階的に活動を仕組んだことで、伝えたいことを文にして表現する技能を身に付け、書く楽しさを自覚し、次の活動につながる事ができた。

二 質疑応答

Q今回の実践は学校全体で行っているのか。個人で行っているのか。また、ゴールはどこか。

A学校は国語を研究にしているわけではない。具体的な目標はまだないが、学習指導要領でねらっているところに取り組んでいる。

Q「おてがみチャレンジ」の依頼はどのようにしているのか。

A活動が始まる前に幼稚園等に依頼文を送っている。夏休みなどの長期休暇を利用して、返信をお願いしている。

三 指導助言

庄内教育事務所指導課主任指導主事 阿部 奈保子 先生

○読み書きは指導者が意図的に指導しなければ身に付かない。本研究は年間のカリキュラムの中で計画的に行っているため、継続性や見通しがあるため、指導者側にもゆとりが生まれる。

○国語科の学習は教材文に目が行きがちなため、「何を学ばせるか」と教師が指導事項を理解してから授業づくりを行うことが大切。

○書いた文章を一年生だから推敲できないというのではない。「自分の考えが伝わるように書けたか確かめよう」と投げかけ、自発的に推敲する習慣を身に付けさせていく。教師自身が学びの土台として適切に鍛えるべき内容を押さえ、子供たちに国語科の学習はおもしろい、書くことは楽しいと思わせていきたい。

【文責 千葉 健哉】

◆授業・協議会④◆〔富沢小学校・書くこと 第四学年〕

【単元名】中心となる語や文を見つけて要約し、調べたことを書くこと

「未来につなぐ工芸品」「工芸品のみりよくを伝えよう」

授業者 仙台市立蒲町小学校 阿部 咲希 先生

一 提案の概要

○本単元は、「読むこと」と「書くこと」の複合単元である。本実践では、「学びをつなぐ」ために、筆者の書き方の「技」（工夫）として身に付いた力を、実際に書く場面で活用できるような工夫した。

○「学びを深める」ため、児童自身が複数の作品を比較・検討する場面を設定した。教師が作成した例文や特定の作品を紹介し、友達と作品を見せ合う場を意図的に設定し、目的に合ったよりよい表現や書き表し方の工夫を児童自身が見付けられるようにした。

二 質疑応答

Q 相手意識、目的意識をどのように働きかけたか。

A 「宮城県の魅力を再発見」というテーマにして取り組んだ。地元だけで気付いていない宮城の魅力を「再発見」して、周囲の人に（相手意識）、改めて宮城の魅力を伝えること（目的意識）にした。

Q 教師が考えていたリーフレットのゴールはどのようなものか。

A ①「初め」「中」「終わり」の構成で書くこと。②「中」のところで、構成メモを基にし、教科書のモデル文を参考にし、学習した書き方の工夫（作戦）を使い書くこと。③伝えたい写真を載せること。④上位群は、自分なりの言葉で表現することと、考えた。

三 指導助言

仙台市立岡田小学校長 玉上 智江美 先生

○今回の授業は学びの系統性や連続性が随所に見られた。①途切れずにつながつていく学び。単元を通して段階に応じた手だてが散りばめられており、学びの活用を容易にする工夫が見られた。②「○○作戦」という技の名称と共通言語化。子供たちにぴったりの言葉で書き方の工夫を捉え、技を共通言語として価値付けていた。③比較・検討による思考の深まり。単なる写しでなく、「このみりよく」という焦点化をしたことよって、短い言葉に絞る書き方に生かされていた。

○国語科は、学力をどこで動かすか、どの場面で考えを形成するかを明確に意識し指導することが大切である。今回の授業ではその点がしっかりとできていた。この学習を通して、日常生活でも活用する力を培っていくことが必要である。今後も技の習得と活用の往還を意識し指導することを大切にしてほしい。

【文責 久保田 育子】

◆研究発表第四分科会◆〔書くこと〕

【研究主題】スモールステップで育む低学年の「書く力」

「書けた！が、もっと書きたい！につながる学びの工夫」

提案者 仙台市立高砂小学校 佐藤 博美 先生

一 提案の概要

○昨年度より児童の読み書きスキルの差に対応するため、「書きたい」「伝えたい」という意欲を引き出す工夫を重ねた授業を展開し、書く力の育成に取り組んできた。

○今年度は引き続き、日常的な言語環境の基盤整備と、発達段階に応じたワークシートを工夫した実践を重ね、児童が達成感を得ながら主体的に表現する態度の育成を目指した。

二 質疑応答

Q 「名人ことば」を詳しく知りたい。

A 子供たちから出てきた言葉や教科書の「言葉のたからばこ」、友達との会話の中で気に入った言葉等を取り上げ、教室掲示している。

Q 毎日、日記はどのように行っているか。

A 学年全体で取り組んでいる。前日のことや授業で楽しかったことなどを朝から昼掃除までのすきま時間五分くらいで書いている。書く時間や内容は子供たちに委ねている。

Q 先生からのコメントは返しているか。

A 子供の文のいいところに線を引き、何が良かったのかを具体的に書いている。子供たちの手を借りながら、すきま時間に行っている。

三 指導助言

仙台市教育センター 指導主事 佐藤 文 先生

○「名人ことば」や「日記の読み合い」が語彙を共有財産化としており学習基盤を築いていた。ワークシートや問答ゲームによるスモールステップは、心理的ハードルを下げ、学習の足場を確実に作っている。○目の前の児童の実態に粘り強く向き合い、手だてを講じる教師の教育熱と工夫が、真の言葉の力を育む原動力となっていた。今後は、この優れた実践をさらに深化・定着させるために、「読み合い」から得られた気付きを生かした協同的な学びの深化が求められる。また、実践の成果を確かな資質・能力につなげるため、「何を見取り、どう評価するか」という観点から評価の工夫を徹底する必要がある。

【文責 高野 真由美】

◆授業・協議会⑤◆「富沢小学校・話すこと聞くこと 第五学年」

【單元名】対話を楽しむ「どちらを選びますか」

授業者 仙台市立蒲町小学校 富樫 僚一 先生

一 提案の概要

○本単元は、対話の練習として設定されている。対話を楽しみ、話合いを成立させるために三つの工夫を行った。

○一つには、話しやすいテーマを吟味し、重点指導事項に迫れるようにした。二つには、説得力のある伝え方の共通理解をし、目指す姿を明確に想像できるようにした。三つには、対話の時間を何度も設定し、成長を実感できるようにした。

二 質疑応答

Q「説得力のある伝え方」を授業者はどのように捉えているか。

A前時で話合いをした後に学級で振り返りをして児童と共通理解を図った。意見を言う際に、体験談があることや図表があることで説得力が増すことを確認した。客観的データが説得力を増すことにつながるが、今回の単元では、考えを形成する学習過程として、体験談などを含めた主観的な思いの形成が重要だと捉えている。

Qルーブリックはどのように作成したか。

A校内研究で用いている話型を基にしている。スタート、ハイパー、マスターというレベルを設定している。それぞれ児童が目標を設定しているが、その尺度（難易度）にはズレがあり、マスターができていないがハイパーができていないなどがあり、厳密にはルーブリックになっていないが、児童の意欲付けにはよいと思った。

Q話合いでは各児童がそれぞれ工夫してメモを取っていたが、難しい児童もいた。ワークシートを使うことや記録の係を作るとは考えたか。

A初めはワークシートを使う予定でいた。しかし、主題はメモを取ることではないため、メモを取ると話合いで考えを形成しやすくなることを指導し、各自で行うことにした。その際に、短く書くことと発言者の名前を書くことは確認した。それぞれの手元にメモがあり、話合いの中で自分の考えを形成できるようにするために、記録係は作らなかった。

三 指導助言

仙台市立木町通小学校教頭 澁谷 貴子 先生

○教師自身が指導事項を理解して授業を行うことが重要。そのうえで、小・中のつながりを意識するためには、前の学年で何を指導事項として行っていたか、この先の学年で何を行うのかを抑える必要がある。ルーブリックを作成する際にも、系統性を意識することで、尺度のズレがなくなる。

【文責 清水 涼平】

◆研究発表第五分科会◆「読むこと」

【研究主題】共に学び、自己の変容を目指す6年生「読むこと」の実践

〓白島小関わり愛の巻〓

提案者 広島市立白島小学校 溝上 大樹 先生

一 提案の概要

○本実践は、他者との関わりを通して、自己の認識を変容・更新させる児童の育成をテーマとした。その鍵となる力が「修正する力」である。

この力は、「他者の意見で自分の考えを見直す力」と定義し、「①受容、②比較、③修正、④表現」の四つの段階を通して指導した。

○6年生「帰り道」の学習では、「インタビューを通して企画書を作成する」活動を実施した。単元構成は、初読後と学習後の二つの企画書と比較することで、登場人物への認識の「修正（変容）」を児童自身が自覚することをねらいとした。

二 質疑応答

Q年度初めに児童同士の関わり合いが成立するのは難しいのではないか。本校では、学校全体で「関わり合い」を重視して継続しており、六年間を通して積み重ねることが重要であると考えている。今回の実践は、その積み重ねの延長線上に位置付けられる。

Q他者と意見が違つてよいという学級の雰囲気をもどるような醸成したか。A本単元の特徴を生かし、児童が登場人物という「自分とは異なる人格」になりきること、心理的な安全性が高まり、自分の意見を率直に出しやすくなったと考える。また、「インタビュー形式」という活動設定が、発言に対するハードルを下げる要因となったのだろう。

Q今回の実践を再度実施する場合、特に修正したい箇所はどこか。

A今後は、児童の自然な読みや多様な考えとの出会いを重視し、授業に広がりを持たせることで、児童が自分なりの考えを深める展開にしたいと考えている。子供の自然な読みに委ねた授業展開を基本としたい。

三 指導助言

全小国研顧問 岩本 和貴 先生

○小学校の国語科指導では、教科横断・小中連携・地域学習といった多様な場を活用し、児童の多角的な視点を育むことが求められる。文学教材の指導では、深い読解力の育成が核となる。具体的には、『ごんぎつね』『帰り道』などで登場人物の「内言」を立場を転換しながら読み深める指導や、『やまなし』における視点の工夫（か）の視点からかわせみを見る）を通して、児童を作品そのものと深く向き合わせる。

○重要なのは、単なる内容理解に留まらず、「作者がなぜ書いたのか」という意図まで読み取る力を培うことである。『少年の日の思い出』『故郷』など、小中九年間を見据え系統的に積み重ねを行うことで、児童に必要な読解力が育成できると考える。

【文責 峯岸 輝】

◆授業・協議会⑥◆〔富沢小学校・読むこと 第六学年〕

〔単元名〕物語を読んで考えたことを伝え合おう

「ぼくのブックウーマン」

授業者 仙台市立富沢小学校 伊藤 聖菜 先生

一 提案の概要

○本実践では、単元を通して次の二点に注力して指導をした。

○一つには「学びの中で働かせる言葉による見方・考え方の視覚化」という手だてである。この手だてによって、子供たちは身に付けた力を振り返り、次の学習に繋げるという学び方を習得すると考えた。

○二つには、「教材の本質に迫るための教師の働きかけ」という手だてである。これによって、子供たちは教材に対する多様な読みの視点を獲得し、自分の考えを形成することができると考えた。

二 質疑応答

Q 考えの形成について

A 他者との交流後に自分の考えを再構築する時間を意図的に設けた。

Q 学びの連続性について

A 身に付けた力を振り返る時間を設ける。次の学習との関連性を児童も意識するようになった。

Q 教材の本質に迫るための働きかけについて

A 本単元ではキャンディチャートを使用することで、四つの視点に沿った複数の登場人物の変化を捉えることができた。

三 指導助言

仙台市立芦口小学校長 野中 映里 先生

○感想や考えをまとめるという活動は、読み取ったこと、知識や経験、他者の考えという様々な事柄が関連付けられて行われている。本実践に取り入れられた、本文を一枚の紙にまとめた資料を読むことや思考ツールの活用、他者との交流を経て考えを広げる活動などは、どれも児童が考えを形成するための源となった。

○学びの連続性を教師が意図して授業を積み重ねていくことで、子供たち自身が、自分の読みを重ねていくことに喜びや楽しさを感じていく。どのように物語を読み取り、どのように考えを交流させるのか、という教師の課題意識が重要であるといえるのではないだろうか。

【文責 宮田 夏帆】

◆研究発表第六分科会◆〔読むこと〕

〔研究主題〕身に付けさせたい資質・能力を明確化した校内研究の取組

～教師と児童でつなぐ・つなげる「読むこと」の実践～

提案者 石巻市立向陽小 菅井 麻衣 先生

一 提案の概要

○本実践を通して、児童が言葉による見方・考え方を働かせ、「深い学びを実現するための指導」の在り方を探り、児童に身に付けさせたい資質・能力を明確化していくことをねらいとした。

○研究初年度に文学教材の理論研修と用語カード活用による指導の日常化を図り、二年目には説明文教材に広げ、表現・構成の工夫に着目したことで、学年部での協働的な授業づくりが活発になった。三年目は新教材の研究を進め、「読むこと」の成果を「話すこと・聞くこと」「書くこと」へ展開し、深い学びの実現を目指した。

○指導事項を明確にしたことで、教師と児童が言葉と向き合って、その意味や働き、使い方に着目して考える時間が充実し、学びの深まりを感じている児童の姿が見られるようになった。

二 質疑応答

Q どのようにして校内での研究の足並みを揃えたのか。

A 外部の講師や校長から基礎基本を指導してもらった。専門性の高い方から学び、国語で必要なことの指導を受けた。

Q 児童の文章を書く力を付けた過程を知りたい。

A 机間指導や赤ペンで良い部分に線を引き、その積み重ねを見取った。

Q 用語カードの使用によってどのような効果があつたのか。

A 教材研究の中で、学習用語の活用を意識した。それを児童に示し、慣れさせ、だんだんと児童が親しみ使う姿も見られるようになってきた。

三 指導助言

石巻市教育委員会 指導主事 佐久間 健悦 先生

○本研究は、学習用語の活用や指導と評価の一体化を通じた国語の階層的な指導を目指している。特に、学びを自己調整できる授業デザインを取り入れ、学びのユニバーサルデザインやマルチレベルアプローチ理論の視点を踏まえた工夫が見られる。研究の最大の成果は、教員集団の同僚性・協働性の向上と組織的なレジリエンスの強化にあり、これが児童の書く力の着実な向上につながっている。

○今後は、ノウハウの継承により実践の組織的な持続を図り、児童のアウトプット方法の選択によってさらに資質・能力の向上が考えられる。

【文責 佐藤 竜晟】

第五十六回東京大会開催に向けて

東京大会実行委員長 川辺 章絵

令和八年十一月に開催されます全国小学校国語教育研究会 東京大会が近付いて参りました。東京を会場とした開催は、昭和四十八年を皮切りに、八回目となり、前回の平成二十八年の開催からは、十年ぶりとなります。令和八年の東京大会も、東京都小学校国語教育研究会(以下、都小国研)がこれまで積み重ねてきた研究の一端を提案するとともに、大会の運営を務めます。

都小国研では、現行の学習指導要領や「令和の日本型学校教育の構築を目指して(答申)」で示された理念をもとに、令和五年度からの三年間、研究主題を「他者と協働し、豊かな言語生活を実現する国語教育」と設定し、研究を進めて参りました。副主題は、令和五年度は『言葉による見方・考え方』を働かせる学びをつくる、令和六年度は「身に付けたい力を意識し、自ら学びを進める」、令和七年度は「学びを通して身に付けた言葉の力を日常生活で生かそうとする」とし、「話すこと・聞くこと部」「書くこと部」「読むこと部」「言語部」の四部会で実践と検証、検討を積み重ねてきました。また、各部会の実践や考え方から、「豊かな言語生活」について、その捉え方や、発揮される「場」などを共通理解し、都小国研全体としての研究の方向性を明確にしながら進めてきました。

大会一日目、なかの zero ホールにて行われる開会行事では、都小国研による基調提案に続き、二つの講演を予定しています。一つは文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官 国立教育政策研究所教科課程調査官・学力調査官 大塚健太郎様の基調講演です。二つ目は、特別講演として、作家 森絵都様によるご講演です。森様は、「カラフル」「みかづき」などの作品を執筆され、現在、光村図書の第六学年の教科書教材として掲載されています。「帰り道」も手掛けられています。森様によるご講演も、参加者の皆様にとって、大変貴重な機会となることと思います。

大会二日目は、都内二つの小学校(第一会場 品川区立大井第一小学校、第二会場 台東区立松葉小学校)を会場とし、午前中は、都小国研各部や多摩都小国研による授業公開および研究協議・指導講評を予定しています。また、午後には、全国の先生方が、国語教育における実践発表を行います。実践発表では、両会場とも、それぞれ五つのブースを開設し、実りある協議ができるよう、二時間設定いたしました。全国からのご提案をもとに、学び合いの時間として、充実させて参りたいと思います。

東京大会、どうぞご期待ください。

(江東区立深川小学校長)

全国小学校国語研究所

全国小学校国語研究所は、平成二十年に全小国研の理事会でその設立が承認され、それ以来、国語科の今日的課題の解明に向けて研究を行ってきました。

十七年次(令和七年度)は、「言語能力の育成を目指す国語科指導法の研究」「個別最適な学び」と「協働的な学び」を基盤とする授業づくりを研究主題及び副主題として、二年目の研究となりました。特に、言語能力の中でも「感性・情緒の側面」に焦点を当て、次のことに留意しながら研究に取り組みました。

○「読解力育成のための基本的な『学習過程』を踏まえつつ、必要に応じて反復・往還し、指導のサイクルを活発に働かせて取り組む学習過程となるよう工夫する

○「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、個々の児童の学びの一層の充実を図る

○「個別最適な学び」と「協働的な学び」のための指導の重点を設定する(学習指導案に「指導の個別化・学習の個性化・協働的な学び」の明記)分科会では、低学年は「スーホの白い馬」、高学年は「大造じいさんとガン」を教材に次のことに重点をおいて研究を進めました。

低学年

- ・心を動かされたところを基に、「問い」をもつ
- ・一番心を動かされたところと理由を基に、伝えたいことをまとめる(「おすすめカード」を選択する)
- ・「おすすめカード」にまとめたことについて、友達と伝え合う

高学年

- ・必要感のある課題をもつ
- ・表現の効果に気付き、自分の考えを明らかにする
- ・物語の魅力を共有し、自分の考えを広げる

令和八年度(十八年次)の研究発表会

日時・・・令和八年十月三十一日(土)

会場・・・中野区教育センター(中野坂上駅下車)
講演・・・水戸部修治先生(京都女子大学教授)
演題・・・「伝え合う活動を通して深い学びの実現を目指す『読むこと』の授業づくり」

(所長 川畑 庄二)

【令和七年度 全小国研 第二回理事会報告】

令和七年度 全小国研第二回理事会が、十月三十日（木）に仙台市内にある「トークネットホール仙台」において開催されました。会長挨拶、開催地代表挨拶、名誉顧問からのメッセージ、そして報告及び審議が行われ、左記の事項につきまして満場一致によりご承認いただくことができました。

一 令和七年度中間会務報告
第三十五回夏季実践交流セミナー報告

令和七年七月二十九日 墨田区立第一寺島小学校にて実施

○挨拶 全小国研の歩みと今後の研究 全国大会の案内

○教師による模範授業と授業考察

〈テーマ〉読むことの問題に学ぶ授業改善のメッセージ

・模範授業者 滋賀県 湖南市立石部南小学校

・助言者 横浜市教育委員会教育政策推進課 元主席指導主事 教頭 村地 和代 先生

・渡辺 誠 先生（現横浜市立東汲小学校校長）

○授業実践発表・協議会

・書くことのよさを実感できる単元づくり（藤村由紀子 先生・東京）

・子供が変わる！共感から始まる説明文指導（川畑 操 先生・東京）

・あの子が学んでよかったと思える文学的文章の学習をめざして（村本 涼 先生・山口）

・身に付けた力を明確にし、子どもの必然から発想する授業改善（本城 脩平 先生・京都）

・自分の思いや考えを書き表したくなる言語活動（八巻 修 先生・栃木）

○特別講演

主体的・対話的に学ぶ児童を育む国語科の授業づくり

京都女子大学教授 水戸部 修治 先生

感謝状・教員表彰の贈呈についての提案、了承。

三 全国小学校国語研究所の研究について（所長 川畑 庄二 先生）
四 今後の全国大会の開催地について
五 ・東京大会（R8）・大阪大会（R9）・千葉大会（R11）

現在、R10の開催地について検討中

六 令和七年度 第五十六回東京大会について
各道府県・政令指定都市の国語研究情報報告がありました。

● 理事会終了に引き続き、総会が開催され、理事会で承認を得た感謝状が

左記の会場校に贈呈されました。

【感謝状贈呈】

仙台市立富沢小学校 様
仙台市立南光台小学校 様

全国小学校国語教育研究会 ホームページについて

全国小学校国語教育研究会では、ホームページを開設しております。当初は、全小国研のホームページと各研究会のホームページとのリンク貼ることを主な目的としていましたが、各研究会で配布をしている案内等を簡易に全国小学校国語教育研究会のホームページに掲載できるようにしました。つきましては、左記の要領で全国小学校国語教育研究会のホームページに掲載することができまので、特段のお取り計らい方、よろしく願い申し上げます。

一 掲載方法

・掲載したい文書等をPDF化して、左記までメールでご送付ください。

メールアドレス：zenshokoken@gmail.com

二 掲載枚数と変更・更新の回数

・特に枚数や更新回数の制限はございません。

三 掲載期間

・原則として掲載した年度の年度末までとなります。

四 掲載場所

・全国小学校国語教育研究会ホームページのトップページの都道府県名からリンクを貼ります。都道府県名をクリックするとPDFが表示されるようになります。

五 提出締め切り

特に締め切りはございません。メールをいただければ、随時対応いたします。ただし、データをいただいてから掲載するまで、だいたい2週間程度お時間をいただくことになります。

六 問い合わせ先

事務局長 高橋 誠人 （墨田区立第一寺島小学校校長）

電話：03-3614-0103

Mail：zenshokoken@gmail.com